風土会

会　報　（2017 年１月）№68

文責　柴田　悦子

第６８回学習会を，平成２９年１月２７日（金）19：00～20：00 福翔高校にて行いましたので，報告いたします。

第６８回の内容　　「価値あるメッセージの送り手」を育てるクラスづくり

講師　重枝一郎先生

1　社会性の基礎となる「自己有用感」
2　「価値あるメッセージの送り手」を育てるクラスづくり
3　クラスづくりとは
4　教師は「ジェネラリスト」であれ
5　教育は一瞬にして永遠

【演習】
○「オープン･ザ･悩み」（悩み相談の感情面＝価値あるメッセージ）
○「ブラインド・デート」※意外と知らない友達のこと（他者理解を深める）
○「偏愛マップ」※うれしい話の聴き方
○「つながっているね」※価値あるメッセージの送り手になるために

「価値あるメッセージの送り手」を育てるクラスづくり

社会性の基礎となる「自己有用感」

自尊感情

→自己に対して肯定的な評価を抱いている状態，自己肯定感，自己存在感，自己効力感とほぼ同じ意味合い。
→自尊心，プライド，うぬぼれ等，プラスとマイナスを含んだ中立的な語とも考えられる
→ほめるだけでは必ずしも好結果にならない。ほめる以前に叱ったり行動を改めさせたりすることから始めるしかない生徒もいる。
→ほめることで自他の評価のギャップが出ることもある。
→諸外国の子どもの自己肯定感は，自分自身による評価を基にしているのに対して，日本の子どもの自己肯定感は，他者にどう評価されているか，他人のために役立っているかなどの他者評価に基づいており，どちらかというと「自己有用感」に近い。
→「自分に自信をもとう」「自分は価値ある存在だ」などの道徳教育的な指導だけで，日本の子どもの自己肯定感を高めることは難しい。
→他者の存在を前提としない自己評価は，社会性に結びつくとは限らない。

自己有用感

→他人の役に立った，他人に喜んでもらった等，他者の存在を前提とした自己評価
→最終的に自己評価であるが，他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされる。
→「クラスで一番足が速いので，クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えるようにがんばりたい」という形の自信。「クラスで一番」かどうかはさほど重要ではなくなっている。
→「自己有用感」の獲得が「自尊感情」の獲得につながる。自己有用感に裏付けられた自尊感情が大切。

社会性の基礎となるもの

→人間関係の希薄化は，他者を平気で傷つけたり，ルールを守らなかったり，集団への参加を妨げたりする。
→10 数年前その方策として『異学年交流の推進』によって「自己有用感」を育むことだった。（文科）
→社会性を育むためには「人と関わる」意欲をもつこと
→遊びなどの自らの体験によってのみ獲得される（楽しい，苦痛なことではない）
→年少者「人と関わることが好き」進んで集団に参加できる

→年長者「進んで協力できた」「自分から働きかけができた」「誰かの役に立つことができた」集団の一員としての自信や誇りの獲得

「褒めること」と「認めること」の違い
→大人が子どもを褒めるときは大人の基準で褒めている
→「認められたい」ときは子どもの基準がある
→表面的だと励みにもうれしくもない
→子どもの目標や努力しようとする点を考えさせておき，そこを評価することが「認める」ことになり，自己有用感を高める
→振り返りシートにただ「がんばった」と書くのではなく，生徒が「こだわった」「見てほしかった」点に触れた記述をする。

「価値あるメッセージの送り手」を育てるクラスづくり

自殺→「自分がいなくても」から喪失感が始まる
→「あなたが大切だ」という価値あるメッセージを他者から繰り返し受け取ることが生きる力をもたらす。たった一言「ありがとう」と感謝されたり，「がんばっているね」と認めてもらったりするだけで『自己有用感』が高まる。
→自殺のリスクを抑える
→『価値あるメッセージの送り手になれているか』
→言語活動，アクティブ･ラーニング，話し合いの授業
※言葉によるコミュニケーション能力を鍛えるクラスづくりは不可欠
※教師が同じ空間で全員に向かって授業をすることの効果→このクラスで一緒に学ぶという空気づくり，期待することで効果につなげる（ピグマリオン効果）
※生徒同士の学び合い効果→自己有用感を高める，役目意識を育てる，価値あるメッセージの送り手となる機会

クラスづくりとは

①お互いをよく知る　②異質を認め合う　③成長し合う関係をつくる

教師は「ジェネラリスト」であれ

「人は人で磨かれる」
関係性の質を高めると，思考の質が高まり，行動が積極的になり，結果が得られるというプロセスは，何らかの集団的な活動を経験した人なら誰もが実感としてもっていると思う。
関係性の質を高めると一言で言っても，そうたやすいことではない。つまり，教師とは，教科の専門性といわれる力だけでなく，「異質をつなぐ力」が教師の総合力（ジェネラリスト）として求められる力になる。
「異質」・・・例えば，学校と社会，教室と家庭，学校と学校，そして教師と生徒，生徒同士・・・この異質なものの境界に新しい活力の源がある。この異質をつなぐためには，心理的な壁を越えて近づかなくてはならない。新しい世界，新しい出会いを生徒が自ら求める意欲をもたせなければならない。
実は，教師と教師をつなぐことが一番重要なことだと考える。そのために学び合う学校文化づくりが必要である。教師の質の多様化を逆手に取り，それぞれのよさを生かし合うことで学校全体の教育力を高めることができる。その際，気をつけるべきことがある。教師としての経験や能力が異なっていても，一人一人の教師は教育のプロフェッショナルである。互いを知り，認め合うことから始め，教師同士は「教え，教えられる」という「縦の関係」ではなく，「盗む，盗まれる」という「ななめの関係」を築かなければならない。つまり，主体性が重視される。
私たち教師は，「教育者」として必要な，人間性と幅広い視野をもつために，学び続けることが大切である。教室で提示できるのは，教科の知識ばかりではない。生徒たちの「窓」になり，多くの「風景」を見せ，「異質をつなぐ力」を発揮しなければならない。そのために教師は，あまり自分がスペシャリストであると思い込まず，ジェネラリストであることを考えてほしい。
私たちは，生徒たちの「大きな窓」にならなければならない。

教育は一瞬にして永遠

教科指導，生徒指導，部活動指導等を行う中で，指導者の求められる資質はたくさんあると思う。その最たるものの一つが「判断力」と思う。二者択一ならまだしも，時に答えのないことにも答えを出さなくてはならないこともある。その際の根底になるのが「この生徒にとって･･･」の一言に尽きる。その結論を導き出すためには，指導者が判断の引き出しをたくさんもっていることが，指導力の高さを表すことになると思う。

学校では，その一瞬の判断が，明暗あるいは生死を分けることもある。

よく，自分の部活動の生徒に対して，「勝負は一瞬，努力は無限」と言っていた。これは，一瞬の判断がその後にどう波及するかを，いつも意識させたかったからである。「まあいいや」というプレーが，その直後の失点につながったり，チームワークを乱すことにつながったり，その自覚を促し成長させるためであった。部活動を通して，社会性の育成につながればという思いである。そして，その一瞬の判断はその生徒において「永遠」に残る生き方のようなものを獲得する。教育は，一瞬にして永遠である。これは，自分の教育信条にもなっている。

【演習】

○「オープン･ザ･悩み」（悩み相談の感情面＝価値あるメッセージ）
○「ブラインド・デート」※意外と知らない友達のこと（他者理解を深める）
○「偏愛マップ」※うれしい話の聴き方
○「つながっているね」※価値あるメッセージの送り手になるために

解　説

「価値あるメッセージ」とは何か

「価値あるメッセージ」とは何か，生徒に聞くと何と答えるでしょう。授業中での「価値あるメッセージ」なら，生活の中での「価値あるメッセージ」なら・・・というように，生徒に考えさせて引き出して，教室のルールをつくっていきます。

例えば，教室は「閉鎖空間」です。知らない人ばかりの中でシーンとしていると，その空間に居るだけでストレスになります。「心理的酸素」がないと息苦しくなります。それでは，どのような態度や言葉が「心理的酸素」になるのでしょう。それを生徒から引き出します。引き出された言葉が，「価値あるメッセージ」になるのです。

基盤をつくる

基盤とは，物事を成立させるための基礎になるもので，土台のことです。何か取組をするときに，基盤がないとうまくいきません。

教師と生徒の関係の基盤は，信頼関係です。

例えば，授業中にじっとしている生徒は，「先生に注意されるからじっとしている」「先生を尊敬しているからじっとしている」など，違いがあります。見える姿は同じですが，生徒の立場に立つと，心の中は違っています。

「先生に注意されるからじっとしている」生徒の場合，言うことをきかせるためには，もっと激しく，もっと強く指導しなければ言うことをきかないという状況になっていきます。

そうならないように，生徒の実感を伴う内容を授業化するのです。

「○○ライフボート」「イメージ・ボード・ゲーム」「言葉のキャッチボール」「えんぴつ対談」「オープン・ザ・悩み」「ブラインド・デート」「つながっているね」などは，実感を伴って話ができる内容です。

言葉の力

教師が生徒に話すときは，モチベーションを高めるように話すことを心がけます。短い言葉でインパクトがあると，思考を深めます。逆に，ヘビのようにネチネチ話しても，生徒は本気で聞いていません。

どんな言葉が，生徒のやる気を失わせるのかを考えると，気づきがあります。

また，インナールール（信頼関係）が高まっていくと，「この先生からほめられるのがうれしい」と生徒は感じるようになります。

さらに，その生徒は何を認めてほしいと思っているのかを見極め，それを認める言葉かけをすると，生徒の心に響きます。

行事の前などに「目標」を書かせる意味は，そこにあります。生徒が認められたいと思っている内容を，教師が知るチャンスになります。一方的に話す教師は，その先を考えていません。生徒がこだわり頑張った部分を認めていくことで，成長を促すことができます。

アクティブ・ラーニングのねらい

「ひとりにもなれる，ひとつにもなれる」

「ひとりにもなれる」は主体的という意味で，孤独にがんばれということではありません。

「ひとつにもなれる」は協働的という意味です。

サッカーでも合唱でも，一人一人に技術がなければ，協働的はありえません。話し合いをするにしても，自分の考えがなければ，主体的な話し合いはできません。

そのことを生徒達に実感させるために，風土会で紹介している演習は活用できます。

「イメージ・ボード・ゲーム」「言葉のキャッチボール」「えんぴつ対談」「オープン･ザ･悩み」「ブラインド・デート」「偏愛マップ」「つながっているね」などについては，会報や本でも紹介しています。アクティブ・ラーニングのねらいと関連づけて，取り入れてください。

社会性の基礎となる自己有用感

自己有用感は，他人の役に立った，他人に喜んでもらった等，他者の存在を前提とした自己評価なので社会性の基礎になります。学校教育では，生徒の自己有用感を高める取組をしているといえます。この自己有用感が高まることで，自尊感情も高めることができます。

また，社会性を育むためには，「人と関わる」意欲をもたせることが大切です。人と関わってよかったと思える体験を積み重ねることで，生徒達は社会性を育みます。

学校教育は，集団の教育力を活用することができる場です。教師は，生徒同士をつなぎ，他者と関わらせ，社会性を育むための「窓」にならなければなりません。

人は人で磨かれる

他者との関係性の質を高めると，思考の質が高まり，行動が積極的になり，結果が得られるというプロセスは，何らかの集団活動を経験した人なら，誰もが実感しているでしょう。

関係性の質を高めるのは，簡単なことではありません。だから，教師は，教科の専門性といわれる力だけではなく，「異質をつなぐ力」が教師の総合力（ジェネラリスト）として求められる力になります。

「異質」とは，例えば，学校と社会，教室と家庭，学校と学校，そして教師と生徒，生徒同士などです。これらの異質なものの境界に，新しい活力の源があります。この異質をつなぐためには，心理的な壁を越えて近づかなくてはなりません。新しい世界，新しい出会いを，生徒が自ら求める意欲をもたせるのが，教師の役割です。

今回のキーワード

○　基盤さえできれば，のっかっていく
○　教育は一瞬にして永遠
○　ジェネラリストであれ
○　生徒にとっての「窓」になる
○　ほめることと認めることの違い

♪　学習会に参加された先生方の感想　♪　（参加人数　２５名）

・「Teacher’ｓ　Teacher」に載っている内容を，今日は改めて詳しく聞くことができて，また，クラスでやってみようと思うものがたくさんありました。「Teacher’ｓ　Teacher」を何回読んでも，ここはどんな風な聞き方をするんだろうとか，どんな話をしたらいいんだろうと，わからない時があって，今日の話は，そういうことか！と腑に落ちたものもたくさんありました。今年，新しい学校に赴任して，とりあえず，自分のいる学年は「ボディリス」「ハーリス」「アイリス」が定着しつつあります。来年度は，全校に浸透するようにがんばりたいと思っています。

・「ブラインド・デート」や「えんぴつ対談」などのＧＷＴは，自分が実際にしたことがなかったので，今回体験してはじめて実感できることがたくさんありました。とてもよかったし，生徒に実践する時に自分が話す内容が今までとは違ってくるという確信があります。やはり，本で見た，聞いただけではなく，自分で体験しないとわからない，入ってこないということがわかりました。

・事前に本で読んで知っていた内容について，実感を伴って理解することができました。今回，教えていただいた活動は，月曜日からでもすぐに実践できるような内容で，とても勉強になりました。ぜひ，やってみたいと思います。

（本を読むだけではわからないことを，「風土会」に参加した先生方が実際に体験し，納得していることがよくわかりました。これからも，本の内容とリンクさせながら，風土会を続けていきたいと思います）

・初任で担任をもち，わからないことが多く，クラスもよい雰囲気とはいえません。少しでも自分の指導力を上げたくて，今日，参加しました。実際に，クラスでやってみたいこと，話したいことがたくさんありました。次の授業の最初に，「ひとりにもなれる，ひとつにもなれる」という話をしたいです。

・あたりまえの言葉は，「第２の矢」であるという言葉が，とても印象に残りました。先に体験させておくことが大切だと，何となくでしかわかっていませんでしたが，先生のお話で具体性をもって感じることができました。「意味」「感情」のあるコミュニケーションの楽しさを，生徒の立場で体験できたので，生徒の気持ちをもう一度考えていきたいと思います。

・もうすぐ今年度も終わってしまいますが，今回体験した「オープン・ザ・悩み」や「ブラインド・デート」は，ぜひ取り組んでみたいし，新年度になっても，「言葉のキャッチ・ボール」や「イメージ・ボード・ゲーム」を行ってみたいです。また，「第一の矢」の話を聞き，とても大切なことだと感じました。今後の指導に役立てていきたいと思います。

・今年度から風土会に参加しています。毎回，勉強したことを実際に生徒に実践しています。前回学んだ「まちがいさがし」を自分のクラスでやってみたところ，とても盛り上がったし，子どもの感想の中に，「今後の授業の受け方や，教え合いの仕方に気をつけたいと思った」という声がたくさんあり，授業規律や生徒同士のかかわり方につながったのを感じることができました。今回、教えていただいたことも，ぜひ子どもたちに返していきたいと思います。自分が生徒になったつもりで活動をすることで，そのままクラスでもできるので，大変ありがたいです。

（「全教育活動で行動者をつくる」教育を推進する先生方が，風土会に足を運び，学び，自分の学校で実践する「行動者」であることに，敬意を表します。来年度も風土会をよろしくお願いします。）